
スケープゴート

時雨瑠奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケープゴート

【Nコード】

N8178M

【作者名】

時雨瑠奈

【あらすじ】

木更津一樹きさらずかずきは、友人と、

恋人、神無月桃香かんなづきももかとの

旅行中、泊まった洋館で、殺人事件に巻き込まれる。

恋人の桃香が、何者かに殺されたのだ。

被害者のハズなのに、容疑者として疑われる一樹。

犯人を捕まえるため、彼は一人、決意するのだった。

プロローグ　　被害者が容疑者!?!

「話を聞いてくださいってばっ!!」

オレは犯人じゃないんですよっ!!」

古びた洋館の一室に、高校生の少年の

悲痛な声が響いていた。彼、木更津一樹^{きさらづかずき}、高校一年生は、

今、殺人事件の容疑者として疑われていた。

被害者は、一つ下の彼の恋人、神無月桃香^{かんなつきももか}。

彼女は、愛しい人の抱擁を求めるような格好で、胸に包丁をさされて死んでいた。

くしくも、その時彼にはアリバイがなく、彼はやってきた警察に疑われていた。眠り薬かなんかで眠らされた、と言っても聞きもしない。

「オレは桃香を殺してないっ!!　彼女を殺す訳がないでしょう!？」

怒鳴る一樹に対し、警察官、強面^{こわもて}な男はあくまで冷静だった。

彼を確実に犯人として考えている。

彼は愛しい人を亡くしたというのに、一切の慈悲も感じられなかった。

「恋人と仲たがいのしたのかもしれないだろう?　仮定だが、君は彼女に」

一方的に別れを告げられた。それで腹を立て、君は彼女を殺した」
「違うっ!!」

一樹は獣のように咆哮^{ほうこう}した。炎が宿ったかのような目で、ぎろり、と警察官を睨みつけた。どうしてこうなったのだろう。

そう思っても、今はこの状況を覆すことなどできなかった。

ちくしょう、と一樹は心中で、自分の運命と、事件の犯人と、目の前の警察官を呪った。

自分が旅行なんて考えたばかりに、桃香は死んだのだ。

燃えたぎる怒りのままに、彼は犯人はこの手で捕まえる、と
決意するのだった。

プロローグ 〽被害者が容疑者!?!〽 (後書き)

初めての推理ものです。いたらないこともあります。が、
ぜひ見てやってください。

第一幕　く海へ行こうく

「海、行かないか？」

一人の少年がはにかみながら言った。

黒い髪に黒い目をした、少し頼りなさそうだが、やさしい顔立ちの少年だった。

彼の名前は、木更津一樹。きさらづ かずき

普通より、やや上の高校にかよう高校一年生だ。

「うん……」

言われた少女は、少し赤くなって頷いた。彼女は、彼の一つ下の恋人で、中学三年生になったばかりだ。

名前は神無月桃香。かんなつき ももか 少し赤味の

強い茶色の髪を腰まで伸ばした少女だ。

それを緩いポニーテールに結っていて、とてもかわいらしい。

その名の通りの、桃の香りのするポプリをいつもつけていた。

「ちづたちも、誘っていいかな？　一樹？」

「ああ、そのつもりだぜ、桃香!!」

ちづとは、彼らの友人、斎藤千鶴さいとう ちづるのことだった。

もう一人いる友人は、名を相原大地あいはら だいちという。

情報を付け足すと、彼は千鶴と付き合っていた。

四人は、おさななじみで、小さい頃から仲がよかった。

くしくも、今日は夏休みになってからまだ少ししか経っていない。

一樹は友人とともに、海に出発した。

「うわあゝ、海だあ」

にこにことしている桃香は、いつものようにかわいらしかった。

今日は二つ結び、いわゆるツインテールヘアというやつにしている、千鶴とおそろいのタンクトップ型のビキニを着ている。

ちなみに、桃香が白で、千鶴がピンク色だった。

千鶴は男勝りな少女だが、顔は天使のような童顔で、とてもその性格とは思えないほどだった。

「早く早く、荷物持ち！！ここにパラソル立ててよ」
「ちよつとは、手伝えよ、ちづっ！！」

大地が眉をしかめながら怒鳴る。やだよ、と千鶴が笑いながら言い、大地が言い返してケンカになる。

いつものことなので、一樹は放っておいているが、大人しく優しい性格の桃香はそうはいかない。

「大地くん、私も手伝うよ」

「いいよ、桃ちゃん。オレがやるから」

「ちよつとお、桃にはそう言ってるくせに、私には手伝えっての！？」

「当たり前だろ、桃ちゃんより、ちづの方が力が強いんだからな」

千鶴がムツ、となり、大地に砂をかけた。

大地が掴みかかり、一緒に海の中にダイブする。

水の掛け合いを شدした二人を、桃香がオロオロと見ていた。ぽんっ、と一樹が細い肩を優しく叩く。

「オレたちも、泳ごうぜ、桃香」

「でも、大丈夫かな、ちづたち……」

「大丈夫。じゃれあってるだけだよ」

安心したように桃香が笑う。桃の花のような色の唇が開かれると、まるで花がほころんだようで、

一樹はさらに彼女が愛しくなるのだった。

一樹が彼女に手を差し伸べた、その時――。

「はなしてくださいっ！！」

幼い少女の悲鳴が海に響いた。

二人は声のした方に歩き出した。今にも泣きそうな顔をした女の子が、三人もの少年たちからまれていた。

淡い金の髪を三つ編みにした、とてもかわいらしい子だった。ぱっちりとした、若草のような緑色の目が印象的である。

体型はかなり小柄で、お人形さんのようでもあった。

「一樹、助けてあげよう？」

自分が同じ目にあわされたかのように、桃香は目を潤ませた。

一樹はその目にとっても弱く、すぐに彼らの方に向かっていった。

「あの、嫌がってるから、離して上げた方が、いいんじゃないんですか？」

「あ？ 関係ないやつは引っ込んでろよ！！」

女の子は少年の手が緩んだすきに、その手を振り払った。「助けてくれた正義の味方の背に隠れる。」

「たすけて……」

「うん、助けるよ。落ち着いて」

「余計なことしてんじゃねえよっ！！」

ナンパしていた女の子に逃げられ、少年たちは激昂した。

隠し持っていたナイフを取り出し、桃香と女の子が悲鳴を上げた。

「なんなんだよ、お前、なめたまねしやがって」

「痛い目にあわされたくなければ、その子をこっちによこしな」

「殺すぞ！！」

抜く度胸が彼らにないことに、一樹は気づいていた。

ナイフを握る彼らの手は、微かに震えている。

女の子の手に力がこもった。さらに目がにじみ、

しずくがこぼれおちそうになる

「桃香、この子連れて下がってろ」

「う、うん……ねえ、あなた、こっちに！！」

桃香は大人しいが、すばしこい子だった。女の子の腕を引っ張り、素早く千鶴たちがいる位置に移動する。

その間に、勝敗はついていた。一見か弱そうだが、

一樹は護身術をやっているのである。

理由は、もちろん桃香を守るためだった。

結果的に、それが吉とでたようである。

「どこかに行ってくれないかな？　気が変わったら、あなたたちのこと、殺してしまうかもしれないよ？」

悲鳴を上げ、少年たちは脱兎のごとく走り去って行った。

「あの、ありがとうございます。私、八乙女^{やおとめるみな}瑠美奈です」
助けられた少女は、にっこりと笑いながらあいさつした。

瑠美奈は十二歳の女の子だった。親が共働きでいないので、一人で海まで出かけて、さっきの男たちからまれたらしい。
「本当に助かりました、お名前、聞かせてください。お礼がしたいので」

「お礼なんていいよ」

「だめです！！　お父さんたちに、お礼はちゃんとするべきだって、言われてるんです！！」

しだいに目にしずくが光り出したので、とりあえず一樹は名乗った。

「オレは木更津一樹だよ」

「神無月桃香です」

「斎藤千鶴。またさっきのような奴らにナンパされたら大変だからさ、あたしらと一緒に行動しない？」

「お、ちづ、たまにはいいこと言うじゃん」

「たまにはって何よ、たまにはって！！」

「いてててて、怒るなってちづ！！　あ、ルミナちゃん、

俺は北原大地だよ」

瑠美奈は笑顔で了承し、彼らはもう一人の同行者を手に入れたのだった。

予約を入れていた旅館は、洋館のような建物で、三人の少女たちは思わず歓声を上げていた。

すぐに黒い服にエプロンをつけた女性がやってきて、

彼らを案内してくれる。彼女は、ここで働くメイドだった。

さきはらはつき
「崎原葉月です。このメイドですわ、

ここにいらっしゃる間、皆さまのお世話をさせていただきます」

彼女は黒縁の眼鏡をかけた、かわいいけれど美人ではない

女性だった。一言で表すのならば、？地味？という表現が妥当だろう。

だが、とてもやさしそうな女性だった。

話し合いの結果、一樹と大地が同室、桃香と千鶴が同室、

瑠美奈は桃香たちの隣室を一人で使うことになった。

桃香は瑠美奈は同室の方がいいんじゃないの、と言ったのだが、彼女はあいまいに言葉をにごし、了承しなかった。

女性陣と大地は別段気にしてもいなかったけれど、そこで一樹はそれを疑問に感じた。何故かはわからなかった。

一面水に覆われた世界に一滴の血が落ちたかのような、変な疑問が一樹の中に芽生えたのだった。

第一幕 く海へ行こうく (後書き)

殺人の前に、なごやかな光景を
お楽しみください。次回は
殺人がおきます。

第二幕　く失ったモノく

他に洋館に泊まっていたのは、

政治家だというお偉い先生やよいかずひこの弥生和彦

と、その秘書、渚竜也なぎさりゅうや。そして、旅館のオーナーの

娘でイタリア語が堪能だという女性、睦咲莉子むつさきりこ。

休暇中の警察関係者、大江川大五郎だった。

それで客は以上である。オーナーも経営者も洋館には

おらず、メイドだという崎原葉月に一任されているらしかった。

「何かありましたら、私におっしゃってください」

ニコリと笑う葉月に、サツと手を挙げたのは、莉子だった。

ショートボブの栗色の髪を揺らし、睨むように彼女を見る。

「お父様は？　なんであなたがこの全権を握ってるのよ、

葉月サン。経営者もどこへ行ったのよ」

「そんなこと言われましても、私に全権を任せるといったのは、

オーナーですわ。莉子さま」

「ふん、上手くお父様に取り行ったのね」

「違います！！　莉子さま、それは、オーナーに対しての侮辱です

わ！！」

かなりの大声で葉月は莉子を怒鳴りつけた。

莉子は、メイドに怒鳴られたという怒りよりも、大人しい女性に大声を出されたという驚きが勝ったようで、口をつぐんでいた。

それから目をそらし、黙ったまま部屋を出て行ってしまった。

ボタン、と扉が閉まる音が響いた。

「莉子さま！！」

葉月は追いか追わないか迷っていたようだったが、

追うのをやめたようで、一樹たちに目を移した。

「何か入用なものは、ございませんか？」

「あのく……」

続いて手を挙げたのは、一樹たちのつれの少女、八乙女瑠美奈だった。

少しはにかんだように口ごもりながら、彼女は口に出した。

「ジュースとかってありますか？ 私のどがかわいてしまったんです」

「わかりました、ルミナさま。……他の方は、どうします？」

「私もお願いします」

「あたしも」

「俺はお茶でお願いします」

「俺もお茶」

神無月桃香、斎藤千鶴、木更津一樹、北原大地の順に返事が返った。

他の男たちは手を上げなかった。

「かしこまりました」

葉月は部屋を出て行き、少ししてから、注文の物を持って戻ってきた。

二人には麦茶、三人にはジュースが配られる。

ジュースは種類がバラバラだったので、それぞれで選んだ。

瑠美奈がカルピス、千鶴がソーダ、桃香が、偶然にも桃のジュースだった。

ジュースやお茶を飲み終わってしばらくすると、一樹は桃香と裏庭を

散歩することにした。瑠美奈たちも誘ったが、千鶴たちは洋館の探検が

したいからと断り、瑠美奈は邪魔したら悪いですから、と一緒には来なかった。

一樹と桃香は、木が茂る場所で歩いていた。鳥の声が聞こえて来て、

桃香の口がほころぶ。一樹も笑った。

「いいね、こういうところ。涼しいし、鳥もいるし。
他の動物いないかな、リスとか!!」

「そうだな、すごくいいな。誰も来ないし」

一樹は桃香を抱き寄せた。彼女の頬が桃色に染まる。

だが、嫌がりはしなかったたので、彼はさらに、痛くないくらいまで力を込めた。

「好きだよ、桃香」

「私も、一樹が、好き……」

「これ、桃香にやるよ」

一樹は彼女に香水の小ビンを手渡した。

それは桃の花の香りがした。

「ありがとう、一樹……」

二人の唇が近づき、桃香が目を閉じる。

一樹と桃香の唇が重なった。

とー

「きゃあっ!!」

悲鳴が聞こえて来て、彼らはギョツとなって離れた。

誰だ!! と一樹が誰何すいかの声を上げると、

ガサガサと草をかき分ける音の後、顔を真っ赤にした

瑠美奈が出てきた。

すべて見ていたようだ。

「ご、ごめんなさい、私、迷っちゃって!! そしたら、一樹さん
たちの声が聞こえたから……」

「俺も、ごめん。大声出しちゃって……。一緒に戻ろうか」

恐縮しながらも瑠美奈が頷いたので、彼らはとりあえず

洋館に戻った。悲劇が起ったのは、翌日になってからだった。

その夜、全員は洋館の広間に集まり、コーヒーを飲んでいた。

「一樹さん、どうぞ」

「ありがとう、瑠美奈ちゃん」

瑠美奈からコーヒーを受け取り、砂糖とクリームを入れてから一樹はそれをすすった。他の人たちには、葉月が配っている。

コーヒーを飲んだ後、ほとんどがそこに残ったが、莉子は自室に戻り、一樹・瑠美奈・桃香も部屋に戻った。

一樹は眠気を覚え、すぐに眠ってしまった。それが、彼の不幸の始まりだった。

「きゃああああああっ!!」

翌朝、瑠美奈の悲痛な声が響いていた。

あの後、千鶴たちは広間でそのまま眠ってしまったのだが、驚いて桃香の部屋に急いだ。

桃の花のきつい匂いが部屋にたちこめている。

桃香は、胸をナイフでさされて死んでいた。

愛しい人の抱擁を求めるような恰好で。

「桃!! どうして、なんで桃が死んでるのよ!!」

「わ、私、昨日桃香さんの部屋で寝ていたんです!!」

でも、起きたら、し、死んでて……」

瑠美奈はボロボロと涙を流し始めていた。

大地はすぐに一樹の部屋の戸を叩いたけれど、

彼の反応はなかなかなかった。

大声で呼んでも返事がない。

最終的に、ベッドから蹴り落としてやっと

一樹は目を覚ました。

「なんだよ、大地……。いきなり……」

「大変なんだ、一樹!!」

「は?」

「桃ちゃんが、桃ちゃんが、死んでるんだ!!」

「なんだって!？」

一樹はそれを聞いて覚醒し、慌てて桃香の部屋に飛び込んだ。もう動くこともしゃべることもない体を抱きしめ、大声で泣いた。

「なんでだよ、桃香。昨日はあんなに元気で……桃香ああああああっ!!」

その声を聞きつけ、集まってきた人々は悲しそうな顔をしていた。

警察関係者の、大五郎以外は……。

第二幕 く失ったモノく (後書き)

ついに桃香が亡くなります。

大五郎に疑われる一樹。

彼は自力で推理を読み解いて

いきますので、次回もぜひ

見てください。

第三幕　　容疑者は恋人

木更津一樹きよりつ かずは、警察関係者の

大江川大五郎の尋問を受けていた。

質問ではない。尋問だ。

明らかに、お前が犯人だろ、っていう顔だった。

ギロリと冷たく睨んできて、正直一樹は怖かった。

「オレ、殺してません!!」

一樹は思わず叫んだ。本当に犯人ではないのだから、叫ばずにはいられなかった。一樹がやったという証拠は一つもない。ただアリバイがなかっただけで、疑われるのは彼としても不本意だった。

それに何より、容疑をかけられているのが、愛しい恋人、かななづきもかもか
神無月桃香の殺人事件なのだから、不本意というしかない。

「桃香はオレの恋人です!!　恋人を殺す訳がないでしょう!?!」

その頃、他の人達は。

「一樹さんが、桃香さんを殺す訳ありません。

あの人、ひどいです……」

泣きじゃくる八乙女瑠美奈やおとめるみなを、

齋藤千鶴さいとうちづると北原大地がなぐさめていた。

睦咲莉子むつさきりこは、何も言わないが、

同情を感じているらしいのは、しかめた眉でわかった。

他の二人は、席を外している。

一樹がいるであろう部屋をながめやり、

千鶴は一人、ためいきをつくのだった――。

「恋人と仲たがいをしたのかもしれないだろう？ 仮定だが、君は彼女に」

一方的に別れを告げられた。それで腹を立て、君は彼女を殺した」あくまで警官は彼を疑っていた。違うっ！ と一樹が吼える。

だが、それでも警官は考えを曲げなかった。

俺は、ただ桃香たちと遊びに行っただけなのに。ただ、楽しく過ごしたかっただけなのに。

ようやく解放された一樹は、用意された部屋のベッドに倒れ込んだ。また明日も取り調べはあるらしい。

地獄のようだった。殺してなんていないのに、

殺した殺したと言われると、本当に殺したと思いこみそうだった。

そのくらい辛かった。もう、嘘でも殺しました、と

言ってしまうそうなくらい辛い。

「一樹さん……」

気がつくと、瑠美奈がそこに立っていた。水の入ったグラスを持っている。隣には、大地と千鶴もいた。

「ありがとう、瑠美奈ちゃん……」

一樹は困ったように笑いながら、起き上って水を受け取った。

一口飲んで、はあっ、と息をつく。

「大変でしたね、一樹さん。あの人はどうでも、私は信じてますから！！ 一樹さんのこと、信じています！！」

「俺も信じてるぜ！！ 一樹が桃ちゃんを殺す訳ないからな！」

「あたしもだよっ！！ 許せないよ、あの警官！！」

一樹は心が和らいだ。信じてくれる人がいる。

こんなに心強いことはなかった。

「ありがとう……皆……ありがとう……」

一樹は嬉しくなり、安心して涙をこぼした――。

それでも、次の日も、尋問は開始された。

さすがに瑠美奈たちも怒ってしまい、

文句を言いに行ったけれど、言い負かされてしまった。

さすがは警察関係者である。

三人は文句を言いながらその部屋を離れた。

尋問は五時間にわたっていた。

一樹は水も食料も取ることは許されていない。

メイドの葉月がやってきたが、今はいらないからと
追いつかれてしまい、何も出すことはできなかった。

六時間を切った頃だった。

「いい加減白状したらどうだね」

「やってもいけないことを、白状なんてできません」

「今白状すれば、罪が軽減できるようにしてやってもいい。

もう質問もしないぞ」

一樹は黙り込んだ。この男は、取引を持ちかけている。

一樹は考えさせてほしい、と言った。もう精神は極限状態
だった。いつもの彼なら即座に断っただろうが、何度も

尋問を繰り返すうちに、このまま罪を認めた方が楽に
なるかもしれない、そう思い始めていた――。

第三幕 〱容疑者は恋人〱（後書き）

仲間だけは一樹を信じています

ですが、一樹はだんだん尋問

されるうちに心に闇が巣くってしまいます。

一樹は取引に応じるのか！？

次回も楽しみにしてください。

第四幕　（第二の事件）

木更津一樹きふらいつかみぎは、わずらわしい気持ちで目覚めた。

また、取り調べは始めるのだろう。

「一樹！！　おはよう！！」

能天気なほどに明るい声が部屋に響いた。

一樹の親友、北原大地の声である。

無理をしてそんな声を出しているのだ、と一樹はわかってはいたが、どうしてもわずらわしく想ってしまう自分に、彼は腹を立てていた。親友の気遣いを素直に受け取れない自分に、苛立ちを感じる。

「おはようございます、一樹さん」

八乙女瑠美奈やとおとめるみなも笑顔で言った。

斎藤千鶴も同じようにあいさつする。

彼女たちは、本当に心からの笑顔だった。

「あんたにいい情報を教えるよ！！」

「今日はあの警官、いないそうなんですよ。報告のために、警察署に行ってるんですって！！」

一樹の顔が輝いた。本当に、彼の尋問には困っていたのだ。そのまま、彼らは心からの笑顔で朝食に向かった。

「おはようございます」

メイドの崎原葉月は笑顔で接客をしていた。

睦咲莉子むつきりこも挨拶をしてきたので、

一樹たちもあいさつを返した。

「災難だったわね、あの刑事、訴えてやりたいわよね」
莉子は朝食のパンをちぎりながら言う。

一樹はあいまいに笑うと、出されたココアに手をつけた。
今日のメニューは、ココアと焼き立てのパン、
作りたてのバターとイチゴジャムが添えてあった。

一樹たちは笑顔でそれを平らげ、葉月に礼を言うと、

部屋に戻った。瑠美奈たちと別れ、一樹は一人になる。

千鶴や大地は残ると言ってくれたが、一樹が

二人の邪魔をしたくなかったのである。

一樹はベッドに横になり、しばし目を閉じた。

悲鳴が聞こえてきたのは、すぐ後のことだった。

「きゃあああああっ!!」

それは瑠美奈の声である。一樹は飛び起きると、

声がした方へと向かって走り出した。

千鶴たちも声を聞きつけてやってくる。

声が聞こえたのは、弥生やよいかずひこ和彦の部屋だった。

戸をノックする前に、青ざめた顔の瑠美奈が飛び出してくる。

その服は前がはだけられており、彼女の目には涙が浮かんでいた。

「瑠美奈ちゃん、何があったんだ!!」

「あの人が、あの人が……」

慌てたように出てきた和彦を指差し、瑠美奈は一樹に

抱きついて泣きじゃくるばかりである。

だが、彼女の状況を見れば何をされそうに

なっていたか分かった。

全員が睨むように彼を見ている。

「この子に何したのよ!!」

千鶴は大人が相手だというのに、

一歩も引かずに彼を睨みつけた。

和彦は冷汗を流しながら

瑠美奈を指でさして弁明を始める。

「この娘が誘ってきたんだ!!」

なのに、急に悲鳴を上げて

逃げ出して……」

「嘘です、私、そんなことしてません……」

瑠美奈はすすり泣きの声を上げると、

さらに強く一樹に抱きついた。

「貴様……!!」

カッとなり、彼は瑠美奈に殴りかかろうとした。すぐ前にいた千鶴を突き飛ばし、彼女に向かっていく。

だが、彼が瑠美奈を殴るのはむりだった。

一樹がすぐに気付いて彼を投げ飛ばしたのだ。

腰を打ち付け、和彦は悔しげに舌打ちした。

「往生際が悪いですよ、弥生さん」

和彦は助けを求めるように視線を泳がせた。

その目が、ゆっくりと部屋から出てきた

なぎさりゅうや
渚竜也を捕えた。

だが竜也は目をそらすなり、

冷たい声で言い放つ。

「先生、嘘はいけませんよ。ちゃんと罪を認めてつぐなってください」

和彦の目が大きく見開かれた。

彼は一瞬何を言われたのか理解ができないくらいだった。それというのも、

渚竜也と弥生和彦の関係が、

仕事仲間としてだけではないからだ。

渚竜也は弥生和彦に引き取られた孤児である。

その日から、二人は親子のような関係だったのだ。

「裏切るのか、竜也!!」

竜也は何も言わなかった。ただ、気遣わしげに

瑠美奈を見やるだけだった。

諦めたようにかがみこむ彼に、「すみません、先生」と蚊の鳴くような声竜也が言った言葉は、彼には届かなかった。

そのまま彼らは部屋に戻るようになった。

瑠美奈が心配な千鶴と一緒に部屋に招き入れ、

瑠美奈もそれを拒まなかった。

一樹は突然の電話で眠りから覚めた。
部屋に置いてある電話が鳴ったのだ。
舌打ちしながら手を伸ばして受話器
を取り、耳に当てる。

「木更津一樹だな」

「誰だ……？」

聞こえた声はボイスチェンジャーなどで
変えてあるのだろう、聞いたことのある声
ではなかった。まだ寝ぼけた声で言うと、
一樹は慌てて身を起こした。

「お前に面白いものを見せてやろう。」

これから弥生和彦の部屋に行け」

「なんで、そんなことお前に言われなくては
ならないんだ？」

「神無月桃香と関係のあることだ。」

行かないのなら話はこれまでだな」

「桃香だと！？ 何か知ってるのか、

おい！！ おい！！」

電話は一方的に切られた。

一樹はそうつと部屋から抜け出すと、
和彦の部屋へと向かった。

鍵は空いていた。渚竜也は出かけているのか、
どこにもいない。ベッドの前のところに、
何故か和彦が寝ていた。

一樹は近寄って見て、思わず悲鳴をあげそうに
なった。彼は眠っていたのではない。

……死んでいたのだ。

彼の顔はひどくぐちゃぐちゃにつぶされ、

胸にも何度か包丁をさした後があった。

「な、なんで……」

そう呟いた瞬間だった。

「うっ……」

後ろから頭を鈍器のようなもので殴られたらしかった。頭がくらくらとする。

はじけゆく視界の中で見えたのは、

男か女かもわからない犯人らしき

ものの、フードをかぶった姿だった――。

第四幕　く第二の事件く（後書き）

見てくださっている方、更新が遅れてすみません。ようやく四話を投稿できました。

第五幕　（再び容疑者）

目覚めたら、そこは死体が転がっていた。

一瞬どこにいいのか思い出せなかった。

どろりとしたものが手についている。

血だ！！　一樹はようやく昨日のことを

思いだした。電話がかかってきて、

慌てて弥生和彦のところへ行ったら、

彼はすでに死んでいて、しかも一樹は

何者かに頭を殴られて昏倒したのだ。

「ちくしょう……誰が……」

「きゃあああああっ！！」

そう呟いた時だった。いきなり

部屋に入ってきた人物が悲鳴を上げたのだ。

そこにいたのは、睦咲莉子むつさきりこで

あった。何故彼女がここにいるのかは分からない。

だが、彼女の顔には失望と恐怖の色が混じっていた。

「ひ、人殺し！！　人殺しいいいいっ！！」

「お、俺は、殺してない！！」

「じゃあ、それは何なのよ！！　殺してないなら、

どうしてそんなものを持つてるのよ！！」

一樹は手元を見てギョツとなった。

彼が手に握っていたのは、柄の部分まで血に染まったナイフ

だったのだ。あまりに軽すぎて気がつかなかった。

頭が混乱していて気付かなかったのだ。

「どうしたんですか、睦咲さん！？」

そこに渚竜也が帰ってきた。その顔が驚愕に見開かれ、同時に悲しげな顔になる。

一樹はどうしたらいいかまったくわからなかった。

自分は殺してなどいない。だが、どう説明したものか
分らない。誰が、信じるのだろうか。

呼び出されて彼の部屋に行ったら、すでに
彼が死んでいて、しかも殴られて昏倒し、
目覚めたらナイフを手に使っていたなどと。

「嘘だ！！ 一樹が人を殺す訳ない！！」

「だって私見たのよ！！ 彼が、死体の前で
血に染まったナイフを構えていたのを！！」

食堂で斎藤千鶴と莉子が言い争っていた。

一樹はうただれた様子で一言も口を利かない。

その様子を、八乙女^{やおとめるみな}瑠美奈が

悲しそうに見ていた。

北原大地は今ここにはいない。

崎原葉月の手伝いとして厨房にいるのだ。

「一樹、何か言ってよ！！ やってないんでしょっ！！」

千鶴の視線が一樹を向いた。

一樹は何も言えずに口を動かすだけだ。

さらに莉子の視線が厳しくなり、

千鶴の目はもはや涙目になっていた。

「一樹ってば！！ ちゃんと弁明してよ！！」

「ほら、やっぱり犯人なんでしょう！？

桃香ちゃんだってあなたが殺したのね。

心配して損したわ！！」

金切り声をあげると、莉子はそのまま
部屋に戻ってしまった。

そこに、大地と葉月がやってくる。

葉月は何も言わなかったが、莉子と同じことを
思っているのが見え見えな視線だった。

一樹は悲しげな顔をしながらも何も言えない。

さらに千鶴の機嫌は悪くなり、瑠美奈の目は潤み、大地は訳が分からないという顔だった。

すっかり頭に血を上らせた千鶴から事情を聞き、不満そうに一樹を見てくる。

一樹はお前らに何が分かる、と責めたいのを必死でこらえていた。せきを切れば、かなりひどいことを言ってしまうかもしれない。

それは八つ当たりだ。決してやっていいことではない。

葉月はパン、スープ、野菜サラダ、デザートのティラミスを彼らの前に置くと、一樹の顔を見るのも嫌だとばかりに盆を持って自室に行ってしまった。

竜也は食堂にさえも来ていない。ショックだったのだろう。一樹は黙って食事をした。普段ならそれはとてもおいしいものだったのだろうが、まったく味がしない感じがした。

それは千鶴たちも同じようだった。

誰も口を利かず、重苦しい空気がその場に流れる。

時間をかけて食べた後、すっかり冷めきった紅茶を口にする、一樹は少し頭が冷えた。

「俺は殺してなんてないんだ……莉子さんにも言っただけ、彼女は信じてくれなかった」

「だからって何も言い返さなくていいの!？」

ケンカ腰な千鶴はテーブルをかなりつよく叩き、隣にいた瑠美奈が怯えたように肩をすくめた。

一樹の睨むような瞳が彼女を射ぬく。

冷えた頭に再び血が上った。

「千鶴に何が分かるって言うんだ!!」

やっていないのに、やったって言われるやつのが持ちが分かるのかよ!! 何が分かるって言うんだよ」

一樹は言い切ると、きびすを返して部屋に戻ろうとした。大地が追ってこようとしたけれど、一人にしてくれとはねつけた。

瑠美奈と千鶴の泣きそうな顔から目をそらし、一樹は部屋に鍵をかけて閉じこもった。どうしてこんなことになったのだろう。

毎日後悔していることを心中で口にした。

何故桃香は殺されてしまったのだろう。

何故自分は何者かから罪をかぶせられているのだろう。

スケープゴート。身代わりの羊。今の自分はまさにその状況だった。疑問はあとからあとから湧いていて来る。

千鶴たちは信じてくれているけれど、いつ自分を疑い出すかわからない。

事実、かばってくれていた莉子や葉月さえも自分を疑い出した。嫌な感情が次々と頭に浮かんでは消えていく。

「桃香、俺はどうしたらいいんだ？ 教えてくれよ、桃香……」
彼女の笑顔を思い浮かべた一樹は泣きながらそう言った。

また、あの日々が始まる。明日にはあの警察も帰ってくるだろう。

また、あの地獄のような、尋問が始まるのだ。

「どうしたらいいんだよ……」

恋人を失った哀れな少年は暗闇ですすり泣くのだったー。

第五幕　く再び容疑者く（後書き）

一樹はひどく悩みます。

罪をかぶせられ、事実を話しても

仲間以外はまったく聞いてくれません。

次回もよろしく願います。

第六幕 〈屈する心〉

木更津一樹は部屋にこもっていた。

体がひどくだるい。目は泣き腫らして真っ赤だった。

何かを食べたいとも思わなかった。

ただこのままずっとここにいて、死んでしまいたいと思っていた。飢えて死んだって構わない。

いや、むしろ死にたい。

こんな目にあわされるくらいならこのまま死んでしまいたい。

一樹には友人たちに対する気持ちさえもうなかった。

と、ノックの音がその場に響いた。

一樹はのろのろと頭を上げ、暗い気持ちで立ち上がる。

ノックの相手が誰なのかということは分かっていた。

出たくないけれど、出るしかないだろう。

しかし、一樹が開ける前に、扉は向こうから開いた。

鍵をかけておいたはずだが、莉子か葉月にでも

合鍵を借りたのだろう。

そこにいたのは、やっぱりあの警官、

大江川大五郎だった――。

連れて行かれる一樹を、仲間たちが痛ましげに

見ていた。止めたいけれど、止められないと分かっているの

でもできない。力がないことを心から悔やんでいた。

「大丈夫かしら、一樹……」

「一樹さん……」

（ごめん、桃ちゃん。俺たちじゃ、一樹に

何もできないよ。本当にごめん……）

一樹は再び大五郎に詰問されていた。

一樹は一応はあそこにいた理由や、何故血まみれの刃物を握っていたのかの理由も話したのだけれど、彼は案の定話を聞いてはくれず、

「お前がやったんだろう」の一点張りだった。

一樹はすっかり落ち込んでいたので、つい彼の口車に乗ってしまった。

「やったって言えば、俺の罪、本当に軽減してくれるんですか？」

桃香の泣きそうな顔が浮かんだが、一樹はそれを打ち消して彼を見つめた。

にやりと口元に笑みが浮かび、

大五郎はいいだろうと請け負った。

「俺がやりました。桃香も、

弥生さんも俺が殺しました……」

「いい子だ」

大五郎がにやにやと小馬鹿にしたように笑う。

一樹は氷のような無表情で彼を睨むと、何も言わずに部屋を退出した。

大五郎もついてくる。

「一樹！！ もう終わったの！？」

「この子が認めたよ。桃香ちゃんも、弥生さんもこの子が殺したらしい」

「そんな！！ 嘘だよね、一樹！！」

千鶴が彼の胸元を掴んで揺さぶる。

一樹は黙って手を振り払うと、仲間たちから逃げるかのようにそのまま歩き去った――。

第六幕　く屈する心く（後書き）

すっかり諦めてしまった
一樹。彼は仲間たちとも
もはや話しません。

次回は第三の殺人が
おきますので、

次のお話もよろしく願います。

第七幕　　（決意する心）

木更津一樹きさらづ いっしゅは一人で部屋に

籠こもっていた。仲間たちが訪ねてきたけれど、無視して部屋に入れたりはしなかった。

もう放はなっておいてほしい。

自分のことなんて、もう放はなっておけばいいのだ。

投げやりな気分で一杯だった。

いつのまにか、一樹は眠りに落ちていた――。

夢の中で、一樹は何もない空間にいた。

いるのは自分だけ。そして、家具さえもない部屋に一人。

一樹はこれが夢であると認識していた。

なぜなら、桃香がいたからだ。

死んだはずの、彼の恋人、神無月桃香が。

彼女は悲しそうな顔で一樹を見つめていた。

一樹は彼女に触れようと手を伸ばす。

彼女の頬に触れてみたけれど、やはり

感触はなかった。温かみも感じない。

やはりこれは夢なのだ、と一樹は思った。

？一樹、どうしてやってもいないことを

認めようとするの？ 私わたしは、嫌だよ。

一樹がやってもいない罪で裁かれるのなんて嫌だよ？

桃香が今にも泣きそうな声で語りかけてくる。

一樹は何も言わず、黙もくってそれを聞いていた。

桃香は昔からそういうところがあった。

嘘うそやいつわりを誰よりも嫌い、誰よりも正義感が強く、

そんなに強くないというのに、よくいじめっ子につかかっていた。

もちろん勝てるわけはなく、一樹がやってつけていたけれど。

？一樹は、弥生さんも、私も殺してない。

辛いかもしれないけど、逃げるのは駄目だよ？

桃香の茶色の目に涙がにじむ。

事実を突き付けられ、一樹はカッとなって叫んだ。

「お前が死んだからいけないんだ！！」

犯人に殺されたりしたから！！」

びくっ、と桃香が肩をすくめた。

一樹は自分を責めたい想いでいっぱいになる。

殺されたのは桃香のせいではない。

彼女は被害者だ。八つ当たりだと分かっているのに、どうしても口は止まらない。

「桃香に俺の気持ち分かる訳ないだろ！！」

残された俺は、どうしたらいいんだよ！！

なあ、教えてくれよ、桃香！！」

一樹は桃香の肩を掴んで揺さぶった。

胸の痛みをすべてぶつけるかのように、彼女を責め立てた。

しかし、もう桃香は泣いてはいない。

一樹が好きな、凜とした瞳で彼を見据えていた。

？ううん、一樹には、もうどうしたらいいか

分かっているはず。真犯人を、見つけて。

復讐なんていい。一樹のために、犯人を見つけて。

もう、私が夢に出るのはこれが最後だよ？

「桃……香……」

ぐいつ、と桃香が一樹を引き寄せた。

力はこっちの方が勝っているはずだが、

軽く彼女に引き寄せられた。

彼女の桜色の唇が彼の唇に触れる。

夢のはずなのに、ここで初めて明確な感触が感じられた。

温かい体が、唇が、一樹を癒していく。

？さよなら、一樹。天国で待ってる。

あなたは、生きて？

「桃香！！ まだ行くな！！ 俺のそばに……」

？ずっと、あなたを見守ってるから？

「桃香！！」

起きた時、一樹はいつもの部屋にいた。

桃香はやはりいない。

だが、部屋にはふわりと桃の香りが満ちていた。
ちょうど、本当に桃香がいたかのように。

「一樹！！ 開けて！！ 食べないと、死んじゃうよ！！」

「おい！！ いい加減にしないと桃ちゃんが悲しむぞ！！」

「一樹さん！！ 開けてください！！」

ドンドンと扉をたたく音が聞こえてくる。

一樹は泣きそうな気持ちになりながら部屋を開けた。

何があっても、自分には、信じてくれる仲間がいるのだ。

絶対に、桃香を殺した犯人をこの手で捕まえて見せる。

警察なんて、もうあてにはしない。

自分たちだけで、犯人を見つけるのだ。

新たなる決意を胸に、一樹は今にも泣きそうな
顔をした三人を見つめていた――。

第七幕 　　く決意する心く（後書き）

一樹が桃香の夢を見ます。

死んでもから見守っていて

くれている彼女に、

ついに一樹が立ち直ります。

次回は第三の殺人。

どんどん人が死んでいき、

事件の終焉が近づいています。

次回もよろしくお願いします。

第八幕　（第三の殺人）

木更津一樹は、今日は仲間と共に桃香の泊まった部屋や、その周辺を散策していた。

一樹が真犯人を見つけたいから協力してくれ、と言ったところ、全員は二つ返事で了承したのだ。

一樹は桃香の部屋の外の芝生にはいつくばって何か手掛かりはないかと探していた。あるのは草や葉っぱばかりで、そんなものは全く見つからない。

舌打ちしたいのを必死でこらえながらも、彼らは辛抱強く探していた。

一樹を助けるため、そして桃香の無念を晴らすために。復讐を望んでいる訳ではない。

彼女だって、そんなことは望んではないから。

ただ、何故彼女が殺されたのかという理由が知りたかった。

あんなに素直でかわい子、何故、殺したのか、と。

「そっち、何か見つかった!？」

さいとうちゅう
斎藤千鶴があせったような

様子で一樹に聞いてきた。

その様子だと、彼女の方には何もなかったようだ。一樹は黙って首を振った。

落胆したような顔になりつつも、千鶴は他の場所を探し始める。と、北原大地が何かを発見した。

「おい、皆、来てみろよ!!」

「何が見つかったの!？」

一番先に千鶴が彼の手元を覗き込んだ。

続いて一樹、不安そうな顔をした八乙女やおとめるみな瑠美奈

がその手を覗き込む。彼の手には、糸のようなものが握られていた。

「糸……ですか……？」

「何でこんなところに糸があるのよ？」

全員は糸をじろじろと観察したが、本当にただの糸だった。

手袋をした手で握ってみるものの、何も仕込んであったりはしない。

まあ、かなり細い糸だから何かを仕込むのは難しいと思うが。

「大方、捨ててあったごみなんじゃないの？　ちゃんとやってよね、

大地」

「俺はちゃんとやってるよ！！　何か見つけたら教えろって言ったから、

ちゃんと教えたんじゃないか！！」

「二人とも、ケンカするなよ！！」

いつものようにぎゃんぎゃんと言い合う二人に、一樹が厳しい声を上げた。

瑠美奈が今にも泣きそうな顔で糸を見つめている。

「瑠美奈ちゃん、どうかしたのかい？」

「何でも、ありません……。ここに立っていると、どうしても

桃香さんのことを考えて、しまつて……」

「瑠美奈ちゃん……」

しくしくとついに泣きだした瑠美奈を見て、

千鶴と大地はケンカをやめて黙り込んだ。

その後は何も見つからず、食事の時間になったので

彼らは室内に戻ったのだった――。

そこにいたのは、全員分の食事を運んでいる崎原葉月、

苦虫を噛み潰したような顔の渚竜也、一人だけにやにと

笑っている大江川大五郎だけだった。

睦咲莉子の姿は見えない。

「莉子さんは？」

椅子に座りながら瑠美奈が心配そうに言った。

もう二人もここでは死んでいる。

もしかしたら何かあったのでは、と思ったのだろう。

一樹たちも心配になって来て葉月に声をかけた。

「莉子さんはどうなさったんですか？」

「莉子様……？」

葉月は一樹に声をかけられて一瞬びくつとなったが、

仕事であることを思い出して何も言わなかった。

千鶴の目が怒りに燃え、今にも殴りそうに

なるのを大地が必死で押さえている。

「私が見て来ます。皆様は、先に食事をしていてください」

葉月はそのまま莉子以外の食事を配ると、

エプロンをはずして部屋を出て行った。

今日の食事は、ローストチキンをはさんだサンドイッチと

コーヒー、ちいさなチーズケーキだけだった。

いつ出られるか分からないので、食料を節約しているのだろう。

一樹たちはゆつくりを食事をしながら葉月たちを待っていた。

「食べられないんですか、竜也さん？」

瑠美奈が何気なく言った。

大地がそこに目をやると、竜也はサンドイッチをじろりと睨みつけただけで、全く手をつけていないのだった。

不安そうに扉をながめやっている。

と、一樹たちの目が見開かれた。

カシャンッ、とミルクピッチャーが床に落ちて割れたのだ。

それだけだったら、そんなに驚きはしなかっただろう。

竜也は、瑠美奈の言葉にいきなり震えだしたのだった。

まるで、ここにいる幼い少女が、強大な力を持った

怪物でもあるかのように。

「た、食べるよ？　ちよっと睦咲さんが心配でね」

「それはよかったです」

竜也は何事もなかったかのようにサンドイッチを掴むと食べ始めた。瑠美奈もにこりと笑って食事を再開する。

「きゃああああああああっ!!」

悲鳴が上がったのは、そのすぐ後だった。

一番先に竜也が立ち上がり、二番目に立ち上がったのは一樹だった。

瑠美奈、千鶴、大地の順で立ち上がり、そのまま五人は扉を開けると声のした方に走り出した。

おっくうそうに大五郎も立ち上がり、幾分緩慢な動きで彼らの後を追いかける。

「葉月さん!! 返事をしてください!! 葉月さん!!」

「莉子さん!! 聞こえますか、莉子さん!!」

葉月と莉子の名を呼びながら五人は走る。

大五郎だけが名も呼ばずただ歩いていた。

と、五人がようやく葉月の姿を見つけた。

彼女は震え、莉子の部屋の前にへたりこんでいた。

血がその服に付着している。

「あ……あ……あ……」

彼女の声は言葉になっていない。

葉月を押しつけるように中を見た彼らの目に映ったのは、絶命する睦咲莉子の姿だった――。

第八幕　　第三の殺人　　（後書き）

ついに第三の殺人が行われました。

混乱する葉月、仰天する一樹たち、

何故か驚きもせずそれを見つめる大五郎、

犯人の目的は！？　そして真犯人は

誰なのか！？

次回もよろしくお願いします。

第九話　く疑われるメイドく

室内は血であふれかえっていた。

しかし、睦咲莉子はまるで眠るかのように安らかな顔をしている。

目を見開いて固まっているのは、六人だけだった。

大五郎は何も言わず部屋に侵入すると、頼まれてもいないのに彼女の脈を取ると死んでいることを告げた。

そんなこと、全員がもう知っていた。

「莉子……」

「えっ？」

「莉子……」

一瞬、一樹たちには誰が言っているのか分からなかった。聞き間違いだとも思ったくらいだ。

莉子、と彼女の名を呼んだのは、渚竜也だった。

自身の服が血で染まるのを構わず、彼は睦咲莉子の遺体を抱きしめてただ涙を流していた。

その様子を見て、彼らは二人がただならぬ関係であることを悟っていた。彼らは一樹たちが見ている前ではよそよそしい空気をよそおっていたが、実際には親密な仲だったのだろう。

「嘘、だろう……!？」　何で、莉子、誰か嘘だって言ってくれよ……

莉子……莉子ッ!!」

叫びながらも彼はいまだに涙をこぼす。

誰も、何も言わなかった。大五郎でさえも。ただ悲しげに彼を見つめるばかりだった。

睦咲莉子の遺体はそのままでは気の毒なので、大五郎が遺族のもとへ届けることになった。

竜也はその決定を、何も言わずに見届けていた。

「これ、何でしょう？　ハチノツキ？」

それを見つけたのは瑠美奈だった。

全員が驚いてそれを見つめる。

床に、血で何か文字が書いてあった。

ハチノツキ、カタカナで書かれた文字だ。

一樹は今までに被害にあった人達のことを考えてみた。

神無月桃香、弥生和彦、そして、睦咲莉子……。

「神無月、弥生、むつさき……睦月？」

ってことは……」

いなくなった大五郎以外の者の視線が、

葉月を向いたのはいたく当然のものだったかもしれない。

死んでいった者達の共通点は、苗字に旧暦の

月の名前が入っていることだ。

そして、その条件に当てはまる人はここには

一人しかいない。葉月だ。

そのことに気がついた葉月は蒼白になって首を振った。

「違います！！　私じゃありません！！　私は、

莉子様を殺してなんていません！！」

竜也が厳しい目で葉月を睨む。

一樹たちは困ったような顔で彼女を見つめていた。

殺していないと叫んだ彼女の目に嘘はない。

だが、条件にあてはまるのは彼女しかないし、

どうしても彼女を疑うしかないのだった。

「お前、莉子と初日に言い争いをしていたらどう！！

いざこざがあつて莉子を殺したんじゃないのか！？」

「違います！！　私には、莉子様を殺す動機も

理由ありません！！　信じてください！！」

葉月の目が竜也、瑠美奈、千鶴、大地、そして

一樹へとさまよった。テーブルを叩いて千鶴が立ち上がる。

「あんたがそれを一樹に言う訳！？　一樹のこと

信じなかったくせに!!」

「それは……」

「皆、ちょっと落ち着けよ、莉子さんのことはともかく、桃ちゃんやあの政治家先生を殺す動機が彼女にはないだろう」

大地がおずおずと口を開いた。竜也がぎろりと彼に目を移す。

「お前もこのメイドとグルなのか!？」

「違う!! ちょっと落ち着けて言ってるだけだろ!!」

それに、まだこの人が犯人だって決まった訳じゃ」

「じゃあこのダイイングメッセージは誰のことを指している?!？」

竜也に怒鳴られた大地は二の句を告げられなくなった。

今ここにいるのは、島崎葉月、北原大地、木更津一樹、

渚竜也、八乙女瑠美奈、斎藤千鶴の六名だけ。

そして、条件が示すのは葉月だけなのだ。

「犯人が、葉月さんをはめるために残したってことは考えられないのかな？」

ぽつりと言ったのは一樹だった。竜也が今度は彼を睨む。

「誰がなんのためにそんなことをしたと!？」

「そんなの俺が知る訳ないですよ!! 可能性として、

俺は言っただけで……」

誰かが何か言うたびに、葉月の顔は徐々に青ざめて行っていた。

エプロンを握りしめ、唇をかみしめた彼女は本当に哀れだ。

何より、竜也は葉月しか疑っていない。

「私じゃ、あり、ません……私が行った時、莉子様は、すでに……」

ぼそぼそと呟く声はまるで蚊が鳴くかのように小さかった。

竜也が彼女を逃がさないように肩を掴もうとした時だった。

「私じゃありません!!」

「おい、お前!!」

葉月は竜也にぶつかるようにして走り抜けて外に飛び出したのだ。茫然として誰も動かない中、はじかれたように走り出したのは瑠美奈だった。

「葉月さん、待って!!」

「待って瑠美奈ちゃん、俺も行く!!」

懸命に走る彼女に、一樹が声をかけてついていった。
他の者たちは、ただそれを見ているだけだった――。

第九話　く疑われるメイドく（後書き）

ダイイングメッセージから

犯人だと疑われる葉月。

彼女は本当に犯人なのか!？

次回もよろしくお願いします。

第十幕　　（釈然としない想い）

「私じゃありません!!」

悲しげな悲鳴は、一樹の中で痛みとなって残っていた。莉子が死んでいた時、そばに

いたのは彼女だけ、そして、床に書かれていた

『ハチノツキ』という文字にあてはまるのは

葉月だけだったのだった。

どうしてだか、一樹には何か違うような

気がしていた。この事件の犯人は、葉月ではないような気がしてならない。理由は分からないのだけれど。

「葉月さん!!　待って!!　そっちは危ないよ!!」

瑠美奈の叫ぶ声が聞こえてくる。

しかし、葉月は決して足を止めることはなかった。

「来ないで!!」

「葉月さん!!」

古びた橋がぎしりと音を立てた。

瑠美奈の顔がさらに青ざめ、一樹も動きを止める。

だが、葉月はせっぱつまった表情のおかげで

自分が今いる場所にさえ気づいていないように思えた。

瑠美奈が一步さらに近づこうとした。

葉月は怯えたようにさらに下がっていく。

「葉月さん、落ち着いてくれ。俺たちは、

あなたが犯人だなんて疑ってない」

「そ、そうです!!　疑っているなら、

あなたを追いかけてなんて来ませんでした!!」

二人の必死な呼びかけにさえ、葉月は答えなかった。

さらに後ずさろうとする。

「あっ!？」

「葉月さん!!」

プツツと言う音がやけにうるさく響いた。

次々とかけ橋の糸が分断され、ぐらぐらと葉月がいる足場、橋がさらにおおきくかしいだ。

「葉月さん、手を伸ばして!!」

「瑠美奈ちゃんやめるんだ!! 君まで落ちる!!」
「離して!! 葉月さん!!」

瑠美奈が彼女を助けようと身を乗り出した。

慌てて一樹が瑠美奈を後ろからはがいじめにする。

瑠美奈は暴れたが一樹の力にはかなわなかった。
足場が崩落する。落ちて行く寸前、眼鏡がはずれ、彼女の素顔が見えた。

子供のように頼りない黒の瞳が一樹を見た。

一樹にはどうすることもできず、ただ落ちて行く彼女を見つめることしかできなかった。

瑠美奈の泣き声が聞こえたけれど、今の一樹には慰めることも彼女を離すこともできなかったー。

千鶴達のもとに帰った一樹達が知らされたのは、葉月の遺書が見つかったという事実だった。

瑠美奈は泣き腫らした目で、睨むように

大五郎を睨みつけて反論した。

「葉月さんが自殺だったって言うの!？」

私と一樹さんは、彼女の言葉を聞いたのよ!!」

しかし、大五郎は表情も変えずに瑠美奈にそれを差し出した。一樹、千鶴、大地、竜也も見ろ。

そこには女性の筆跡で遺書が書かれていた。

筆にはなれていなかったのだろうか、それとも慌てて書いたからだろうか、はじめの方に墨が垂れ落ちた後がある。

その内容は、こうだった。

『私は莉子様をずっと憎んでいました。

彼女が、私とだんなさまの関係を

疑ったからではありません。

今はきつい態度を取ることもありますが、

幼い頃はそれはそれは私を自分の姉の

ように慕ってくれたものです。

睦咲のだんなさまが私にしたことは、

たとえ娘である莉子様に優しくされた

ことがあってさえも許せることではなかったのです。

睦咲のだんなさまは、私の両親を殺しました。

事故だった、と言えはそうなのかも知れません。

ですが、彼はその事実をもみ消すために

ひき逃げをしたのです。

彼が出頭すれば両親は助かったかもしれませんが。

ただ、自分の立場を守りたいがだけに彼は

私の両親を殺したのです。

彼はその両親に娘がいることを突き止めると、

私を引き取ってメイドにし、多額のお金を渡しました。

それは、口止め料のつもりだったのでしょう。

ですが、私の怒りが、恨みがそれで消えるわけではありません。

私は表面上はにこやかに彼に接しましたが、内面では

怒りが燃え上がっていました。

そして、私は復讐を実行に移したのです。

彼を殺さず、彼の一人娘を殺すことが私の最大の復讐でした。

弥生和彦と神無月桃香を殺したのは、カムフラージュのためです。

私に弥生和彦と神無月桃香との接点は一つもない。

彼女たちを殺すことで、私は莉子様に自分が殺されるという

警戒心を取りはらったのです。

一樹さんに罪をなすりつけたのは、幸せそうだった彼が

憎らしかったからです。最後に、瑠美奈や彼も道連れにしてやりたかったのですが、失敗しました。

私は、私の死をもってこの事件を終わらせます。 葉月』

瑠美奈はさらに涙をこぼしながらそれを読み終えた。

千鶴たちも何とも言えない顔で立ち尽くしている。

だが、一樹だけは違った。

彼は、釈然としない思いが胸に渦巻くを感じていた。

演技で、あんな必死な顔ができるのだろうか。

本当に、犯人は彼女なのか？

まだ、真犯人はどこかにいて、彼女は

真犯人に殺されたのではないのか？

想いはさらに大きくなるばかりで、一樹は

どうしてもこの事件が終わったとは感じられずに

その場で考え込んでいたのだった――。

第十幕 く釈然としない想いく（後書き）

解決した事件。なのに、一樹はどこか違うと感じています。

次回は、一樹がさらに事件を深く見ようと探索を始めます。

第十一幕　　事件再探索

木更津一樹は地面にはいつくばって事件の手掛かりを探していた。その場にいるのは一樹だけではない。斎藤千鶴、北原大地、八乙女瑠美奈も同じように事件の手掛かりを探していた。

一樹に、葉月が犯人とはどうしても思えないから一緒に手掛かりを探してくれ、と言われたのである。

決意の顔で瑠美奈が頷き、他の二人にも異論はなかった。

渚竜也も誘ったのだが、「今は一人にしてほしい」と部屋に閉じこもって

しまっていた。警察官である大江川大五郎は犯人が死んだのだからこれで

事件は終わりだと歯牙にもかけない。

そこで、一樹たちは大五郎には見つからないように事件を解決させる

事に決めたのだった。最初は桃香を殺した犯人が憎かった一樹であるが、

今はどうして犯人がこんなことをしたのかと思う気持ちが強かった。

葉月の真実なのか嘘なのか分からない遺書を見たからかもしれないが、

犯人にも事情があるような気がしていたのだ。

瑠美奈も一樹も千鶴も大地も黙々と手掛かりとなりそうな物を探していた。

もちろん指紋を残さないようにとの配慮から全員軍手着用である。と――。

「一樹さん!!」

瑠美奈が鋭い声を上げた。三人が慌てて彼女に駆け寄る。

瑠美奈の手には黒いビニールのような何かがあった。

切れ端らしくひどく短い。

「これ……なんでしょうか」

「ビニール紐じゃないの？ 何か縛ってたとか」

「でも、短いな。切るとしてもここまで短くするか？」

一樹たちは話会いながらビニールの切れはしらしき物を取りあげ、一樹が代表でポケットに放り込んだ。

結局今日はそれ以上いい結果は出せないまま日が暮れてきたので一旦引き揚げることになったのだった。

いつも料理をしてくれていた葉月がもういないので、瑠美奈と千鶴が

今ある材料でできる簡単な料理を作ることになった。

が――。

「痛いっ!!」

包丁を手に取った瑠美奈がいきなり大きな声を上げたので、慌てて一樹

達が台所に走り寄った。瑠美奈は薬指を抑えている。

「どうしたんだい瑠美奈ちゃん、指を切ったの？」

「いいえ、この前怪我をしたところが痛んだんです……」

一樹が指を覗き込むと、何か針のようなもので怪我をしたような跡があった。しばらく瑠美奈は一樹の顔を見つめていたのだが、

何か特別な反応が来ないのが分かってつまらなそうな顔になった。

「瑠美奈ちゃん？」

「もういいです」

千鶴が新しいおもちゃを発見した子供のような顔になった。

瑠美奈の肩をつついてからかうように言う。

「瑠美奈ちゃんってひょっとして一樹のこと――」

「そ、そんなんじゃないありません!!」

真っ赤になって否定する瑠美奈に、皆くすくすと笑いだした。

怒った瑠美奈が千鶴を追いかけまわし、千鶴がきゃあきゃあ

言いながら逃げ回る。料理を作るのに時間がかかってしまったのは

当然の結果だろう――。

千鶴と瑠美奈はそこまで高度な料理はできなかったため、昼食と夕食な簡単なサンドイッチになった。

一樹達と大五郎はそれをおいしそうに食べたのだが、やはり竜也は部屋に閉じこもって出て来なかった。瑠美奈が持って行ったのだが、サンドイッチの乗った皿は減ることなく外に出されていた。

その後、一樹はこっそりと大五郎に見つからないように抜け出すと、

町に行き香水の瓶を買ってきた。桃香の墓の前に立った時に、以前送ったのと

同じ香水の瓶をそなえるためである。一樹はそれを購入した後にすぐ戻って

来ると、自分の部屋に閉じこもった。一度ふたを取って匂いを嗅いでみると、

甘い桃の匂いが部屋中に広がった。桃香のポップリにもよく似たいい香りである。

「桃香……」

「一樹さん、ちょっといいですか」

「あ、ちょっと待って!!」

一樹は慌てて香水瓶のふたをしめると枕の下に敷いてそれを隠した。

それから瑠美奈にOKの返事をする、瑠美奈はすぐに入ってきた。

ちょっと恥ずかしそうにしながら彼を見つめる。

「一樹さん、千鶴さんの言ったこと、きにしないでくださいね？」

私、あなたのことが好きじゃないですから!! あ、え、えっと

仲間としては好きですけど男性としては――!!」

必死に弁明しようとする瑠美奈に、思わず一樹は笑いをこらえるのに

必死だった。笑いそうになりながら言う。

「うん、大丈夫。誤解なんてしてないよ」

「だいいいんですが……あら、この香りいいですね。香水ですか？
桃香さんつけてましたよね？」

「瑠美奈ちゃんは桃香に聞いたの？」

「はい。一樹さんからもらったんだって嬉しそうに言っていました！
」

「……そっか。瑠美奈ちゃん、明日も一緒に手がかりをさがして
もらってもいいかな？」

「もちろんです！！ 私も桃香さんを殺した犯人が許せませんから
！！」

一樹は帰っていく瑠美奈に手を振りながら絶対に犯人を見つけ出
して

事情を聞くと改めて決意をするのだった――。

第十一幕　く事件再探索く（後書き）

久しぶりに投稿しました。今回はほのぼのを目指して書きました。瑠美奈達が桃香の死のてがかりを探し始めます。

今回は一樹が犯人と思われる人物の言葉の違和感に気付きはじめます。

まだまだお話は続くのですが、『悲月殺人事件』はもうすぐ幕が降ります。

見てくださっている方、長くかかってしまつてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8178m/>

スケープゴート

2012年1月11日10時46分発行